

平成 8 年度 Best Author 賞の表彰

本学会では平成 3 年度から「Best Author 賞」を設け、学会誌「情報処理」に掲載された記事の中から、とくに多数の会員の研修ならびに学術・技術の啓蒙、普及に貢献したものをを選び、その著者を表彰することにしております。

本賞の選考は、表彰規程および Best Author 賞候補者選定手続に基づき、選定委員会（委員長 槻木公一）が、学会誌「情報処理」第 37 巻第 1 号～第 12 号に掲載された対象記事 140 編につき慎重に審査を行いました。その結果、下記の 6 編が受賞候補記事として選定され、第 419 回理事会（平成 9 年 4 月）の承認を得て決定されました。なお、本学会表彰規程により、第 39 回通常総会（平成 9 年 5 月）において著者に表彰状および賞金が授与されました。

特集「マルチメディア社会をめぐる法律問題—知的財産権を中心として—」（Vol.37, No.2）

解説「ネットワークをめぐる法的課題」



名和小太郎君（正会員）

1956 年東京大学理学部物理学科卒業。工学博士。石油資源開発(株)、旭化成工業(株)、(株)旭リサーチセンター、新潟大学法学部を経て、1996 年より関西大学総合情報学部教授。1970 年代前半にコンピュータネットワーク開発に没頭。著書に「技術標準対知的所有権」

(中公新書)、「雲を盗む」(朝日新聞社)など。公職として著作権審議会マルチメディア小委員会専門委員、国立国会図書館科学技術関係資料整備審議会委員など。

【推薦理由】

本解説は、最近のネットワーク上で起こっている法的課題について、一般読者向けに解説したものである。利害がからみあい、複雑化している知的財産権の問題を、米国の事例や判例に基づいて具体的にわかりやすく記述している。また、技術革新とともに、現在進行形の形で変化し、問題発生から合意、法律体系へと法的課題の解決が図られていく米国社会の姿も読みとれ、興味深い内容である。米国の事例は、インターネットの発展期にある我が国でも将来的に発生し得る問題であり、今後の日本のネットワーク社会の在り方を考える上で、示唆に富んだ内容である。本解説は学会誌モニタからも高い評価を受けており、本賞に値する。

特別論説「情報処理最前線」(Vol.37, No.4)

電子現金の最近の動向



大塚 玲君（正会員）

1966 年生。1991 年大阪大学大学院工学研究科修了。同年(株)野村総合研究所入社。現在、同社新社会システム研究センターに在籍。電子現金やプライバシー保護など、暗号技術の社会システムへの応用に興味をも

つ。電子情報通信学会、IACR、ACM、IEEE 各会員。



篠原 健君（正会員）

1946 年生。1975 年大阪大学通信工学科卒業。1975 年同大学院卒業後、野村コンピュータシステム(現、野村総研)入社。以来、一貫して先進的情報通信システムの企画、研究、開発に従事。大規模金融オンラインシス

テム、グローバル通信システム、VAN、衛星通信システムなどの企画設計開発、また CASE、マルチメディア、AI 分野などの研究開発に従事。技術研究開発部長、IT 研究センター長などを経て現在にいたる。本学会誌編集委員、電子情報通信学会員。

【推薦理由】

電子現金は、IC カード型とネットワーク型に分類される。IC カード型電子現金は、日本の一部地域での利用例がマスコミで報道されて注目を浴びている。ネットワーク型電子現金は、インターネットを利用したサイバビジネスの決済手段として、情報処理技術者だけでなく金融業や流通業など多くの人に注目されている。本論説は、この 2 種類の電子現金の実験プロジェクトおよび方式についてのタイムリーな解説である。オンライン型の電子現金は暗号という専門性の高い技術に基づいているが、本論説での色紙と複写用カーボン紙の例えによる説明は、非常に分かりやすいものである。また電子現金の分割利用など今後の発展の解説も非常に興味深い。

解説「頭の中に単語はいくつある？」(Vol.37, No.4)



天野 成昭君

1959年生。1983年東京大学文学部心理学専修課程卒業。1985年同大学院人文科学研究科修士課程(心理学)修了。同年日本電信電話(株)電気通信研究所入所。1996年東京大学より博士号(心理学)取得。現在日本電信電話(株)基礎研究所情報科学研究部主任研究員。

[推薦理由]

頭の中にある単語数という、通常はあまり意識していないことを一般的な立場からと情報処理の立場から分析し、興味のある解説となっており評価できる。アンケート調査して推定しているが個人差や時間差がある。また、文字単語と音声単語が同一でないことなどは一般にはなかなか気づかないようである。そして、音声単語の知覚処理の最近の話題の単語確定処理のユニークネスポイントなどを使い、筆者は単語数を約27,000語と推定するのである。最後に、単語数テストが付録についており、皆さんもやってみると面白いと思う？

特別論説「情報処理最前線」(Vol.37, No.7)

データマイニングの最新動向—巨大データからの知識発見技術—



福田 剛志君 (正会員)

1966年生。1991年早稲田大学大学院理工学研究科修士課程修了。同年日本アイ・ビー・エム(株)入社。現在、東京基礎研究所副主任研究員。オブジェクト指向データベース、データマイニングなどの研究に従事。

ACM, IEEE, CS 各会員。



森本 康彦君 (正会員)

1967年生。1989年広島大学工学部第二類(電気系)卒業。1991年同大学院情報工学専攻博士課程前期修了。同年より日本アイ・ビー・エム(株)東京基礎研究所勤務。オブジェクト指向データベース、データマイニング

などの研究に従事。ACM, IEEE Computer Society 各会員。



森下 真一君 (正会員)

1960年生。1983年東京大学理学部情報科学科卒業。1985年同大学院修士課程修了。同年日本アイ・ビー・エム(株)入社。現在東京基礎研究所データマイニング・プロジェクト担当。理学博士(東京大学)。1990～

1992年Stanford大学計算機科学科客員研究員。データベースシステムの開発とその最適化理論の研究に従事。著書「情報数学講座10巻知識と推論」(共立)。



徳山 豪君 (正会員)

1957年生。1979年東京大学理学部数学科卒業。1985年同大学院博士課程修了(理学博士)。1986年日本アイ・ビー・エム(株)入社。現在東京基礎研究所専任研究員。1992～1993年IBM T. J. Watson研究所研究員。

1992年情報処理学会研究賞受賞。計算幾何学を中心に、アルゴリズムと計算理論を研究。著書「はみだし幾何学」(岩波)、「離散構造とアルゴリズムI」(近代科学社、共著)。

[推薦理由]

大量のデータから知識を発掘するデータマイニングの手法をわかりやすく解説した。データマイニングの第一ステップとして、データベースの属性間に「格言的(経験的)」ルールを多数作り、それらを使ってデータを解析する手法を説明した。つぎに、ユーザの予測を自動的に限定することにより探索の効率を上げる手法、さらにユーザの曖昧な指定にもとづき最も適切であろう法則を自動的に導出する手法を、著者の研究成果をもとに説明した。近年注目されているデータマイニングの最新動向を、この分野の専門家でなくても理解できるよう解説し、初学者にも参考となったことは高く評価できる。

特別論説「情報処理最前線」(Vol.37, No.10)

次世代のインターネットを形作る VRML の 3 次元の世界ー VRML の技術詳細と、最新動向ー



安藤 幸央君

1970 年生。1993 年国立北見工業大学工学部環境工学科卒業。工学士。同年(株)エヌ・ケー・エクサ入社。現在技術部・コンピュータ技術チーム所属。OpenGL/Radiosity/Raytracing を中心とする Computer Graphics 関連業務に携わる。現在では国産 CG ソフト QuBISM(主に建

設業界で景観シミュレーションに用いられる)の開発に携わる。近年 WWW をはじめとする Internet 関連にも携わる。Internet 上で 3 次元 CG を扱おうという VRML に、そして VRML と Java の関係から、VRML, Java に深く関わり現在に至る。著書「VRML60 分ガイド」(ソフトバンク, 監訳), 「これが Java だ! インターネットの新たな主役」(日本経済新聞社, 共著)。VRML Consortium Japan メンバ/OpenGL_Japan メンバ。

【推薦理由】

本論説は、インターネットを巡る最新の話題の 1 つである VRML について、一般読者向けに分かりやすく解説したものである。VRML は 2 次元世界の WWW に 3 次元のモデルの表現を可能とする言語である。VRML の歴史的背景、活用事例、技術内容、今後の動向などが限られた紙面の中で読みやすくまとめられている。写真、図表も多く、参考となる情報の入手先(URL)も記されており、読者に大変親切な内容といえよう。学会誌モニタの評価も高く、本賞に値するものとして評価できる。

特集「計算機システムを支える最新技術(装置編)」(Vol.37, No.11)

解説「ハードディスクの大容量化、高速化技術」



橋本 雅伸君

1957 年生。1980 年東京大学工学部機械工学科卒業。1982 年同大学院工学系研究科機械工学専門課程修了。同年日本電気(株)入社。入社以来中央研究所にてプリンタ、ハードディスク装置など計算機周辺端末装置の研究開発に従事。1989 年より 1 年間カリフォルニア大学

バークレー校機械工学科客員研究員としてハードディスクヘッド媒体インタフェースの研究に従事。現在、同社機能エレクトロニクス研究所メカトロニクス研究部にてハードディスク装置の機構制御、記録再生信号処理技術などの研究開発に携わる。日本機械学会会員。

【推薦理由】

本解説は、大容量化、高速化が著しいハードディスク装置の最新技術を解説したものである。大容量化、高速化はさまざまな要素技術の改良によって達成されたもので、その全貌を少ない紙面で説明することは難しいが、本解説では、ヘッド技術、媒体技術、インタフェース技術、信号処理技術、サーボ機構技術ときわめて多岐にわたる最新技術を図を多用するなどして平易に解説した。また、記述は技術的に正確であり、今後の動向、重要となる技術などにも適切に触れられている。この解説の特集の主旨である「今後、数年間は使える教科書」として価値ある解説であり、本賞にふさわしい。